

死ぬ神秘主義と生きる神秘主義

—イグナティオスとエックハルト—

Mysticism of Death and mysticism of Life — Ignatius of Antioch and Meister Eckhart —

中 川 憲 次

Kenji Nakagawa

はじめに

アンティオキアのイグナティオスの殉教思想については、1978年に入学した関西学院大学神学部の教会史の講義でその「ローマの信徒への手紙」における激越な殉教願望の言葉に触れて以来、折に触れて思い出してきた。ここでは、その「死ぬ神秘主義」とも言えると思われる思想と、中世ドイツ神秘主義の巨星マイスター・エックハルトがそのドイツ語説教の中で展開した「生きる神秘主義」とも言えると思われる思想とを比較検討してみたい。その際、佐藤吉昭氏がその著書『キリスト教における殉教研究』の中でイグナティオス研究の方法論について次のようにまとめておられるのは、われわれにとっても示唆深い。曰く、

「史料上においても、テキスト上においても、極めて制約されているアンティオキアのイグナティオスの思想と歴史的足跡を、事実即して完全に明らかにすることは、今日においても不可能に近い。ところで、こうした状況下で、二つの異なった研究態度と方法の導入が可能である。第一に、限られたデータから、少しでも忠実な彼の人格像と思想を再現すべく、テキストの中で特異なキーワード、そして概念を取り上げ、そのそれぞれを言語学的にも、統計的にも、また、それぞれの概念の分別と把握、他者の場合との比較考証などの作業においても、もっとも的確な方法論を用いて作業を進め、次に、そのそれぞれの概念の相関と離反

を追及することで、再編成、または再構築させる方法が考えられる。第二に、こうした根気とひらめきを必要とする方法を避け、むしろ、その時代の背景から、その人物像、思想傾向を文献操作で想定する方法も存在するであろう。」(註1)

これが、永くイグナティオスの研究をしてこられた佐藤氏の到達された研究方法の極みである。佐藤氏は今しがたの引用の中で、第一の方法には「根気とひらめきを必要とする」としておられたが、「根気」はともかく、第二の方法にこそ「ひらめきを必要とする」とわれわれには思われる。いずれにせよ、われわれは佐藤氏の示された方法の第一と第二を融合させつつ、特に第二の方法に重点を置いて今回の研究を進めてみたい。

1 イグナティオスについて

ここでは、エウセビオスの『教会史』の記述から引用したい。まず、第3巻22章に曰く、

「イグナティオス、アンティオケアで第二代監督となる。その頃、エウオディウスが初代監督だったアンティオケアでは、イグナティオスが第二代監督として有名であった。」(註2)

そして、36節に曰く、

「イグナティオスとその書簡」この頃のアジアでは、ポリュカルポスが生きていた。彼は、使徒たちの弟子であり主の目撃者であり、同時に奉仕者でもあった者たちによって、スミルナの教会の監督に任命されてい

た。彼の同時代人でよく知られていたのは、ヒエラポリスの教会管区の監督だったパピアスと、現在でも多くの人々の間で依然として忘れられていないイグナティオスだった。後者は、アンティオケアでペトロの監督職を継いだ二代目だった。伝承によれば、イグナティオスはキリストを証したためにシリアからローマの都に送られ、獣の餌食になった。彼は監視人付きの最も厳重な警戒の下にアジア経由で送られたが、途中の都市の教会管区を御言葉の説教(ホミリア)と勧め(プロトロペー)によって励ました。彼はとくに当時をはじめ頭をもたげはじめた異端の派を警戒するようにと警告し、使徒たちの伝承にどこまでも忠実であるように、と彼らに勧めた。彼は殉教の途次にあつたので、その伝承を安全のために文書の形で証する必要を感じた。そこで彼は、ポリュカルポスのいたスミルナに来たとき、エベソの教会宛に、そこの牧者であるオネシモの名をあげた一通の書簡を書いた。また彼は、監督ダマスの名を二度あげたものを、メアンデルのマグネシアの教会宛に、そしてそこの指導者がポリュビオスだったと語っている別の一通をトラレスの教会宛に書いた。彼はその他にも、ローマの教会宛に書き、彼らが彼が殉教しないようにと懇願して、彼が望んでやまないその希望を彼から奪ったりしないようにと要求した。」(註3)

エウセビオスはこのように記した後、イグナティオスの手紙から、適宜、引用している。その引用については省略するが、エウセビオスが記している、130年頃生まれて202年に没したとされるエイレナイオスという人のイグナティオスについての言葉をご紹介しておきたい。曰く、

「エイレナイオスも彼(イグナティオス)の殉教を知っており、彼の書簡に言及し次のように言っている。『わたしたちの仲間の一人は、神への証しのために野獣の餌食に定められたときくわたしは神の穀物である。野獣の歯で粉々にされても、それは混じりけのないパンになるためである』と云った』(註4)

もう少し補足しておこう。イグナティオスは、50年頃にシリアで生まれたと思われる。そして殉教したのは、98年から107年の間であつたらしいとされている。すなわち、50歳そこそこの人生であつたと思われる。

2 『イグナティオスの手紙

——ローマのキリスト者へ』4章と5章(註5)

「4章①私は、すべての教会に手紙を書き、またあらゆる人に指示を与えているのですが、私はすすんで神のために死ぬのです。——もしあなた方が妨害しなければ。お願いですから『時宜にかなわない』親切はしないで下さい。私に獣の餌にならせて下さい。私は獣を通してこそ神に到達することが出来るのです。私は神の穀物であり、キリストの潔きパンとなるため、獣の歯で碾かれるのです。②どうか獣が私の墓となるよう、また私が死んだのち誰かに迷惑をかけるといけませんから、獣が私のからだのどこも残さないよう、むしろ獣を煽って下さい。世が私のからだをも見なくなったとき、そのとき私はほんとうにイエス・キリストの弟子となるでしょう。こういう道具(獣)によって私が神への犠牲とされるよう、キリストに願って下さい。③私はペテロとパウロのようにあなた方に命じているのではありません。彼等は使徒、私は断罪された者です。彼等は自由であり、私は今に至るまで奴隷なのです。でももし私が受難すれば、私はイエス・キリストの自由人となり、彼にあつて自由人として甦るでしょう。そして私は今縄目の中で無欲になることを学んでいるのです。

5章①シリアからローマまで私は獣と闘いつづけています。陸でも海でも、夜も昼も、十頭の豹——一隊の兵士——に捕縛されて。彼らは親切にされると余計悪くなるのです。私は彼等の虐待によって、一層弟子らしくなるのですが、だからといってこうして義とされたわけではありません。②私のために備えられた獣を、私は喜びたいと思います。そして獣が私のためにいきり立つよう願っています。さっさと私を食い尽くすよう、けしかけてやろうと思っています。臆病風に吹かれて、ある人々に触れなかったようなことが起こるといけませんから。獣が折角食われたがっている人間を食いたくないといっても、私は無理にでも食わせてみせます。③どうか黙認してください。私は自分の益になることを知っています。私は今(キリストの)弟子になり始めているのです。目にみえるものもみえないものも、何も私がキリストに到達することを嫉妬しないように。火でも十字架でも獣との闘いでも、骨

を散らされ身を砕かれ全身を碾かれることでも、悪魔のひどい仕打ちでも（何でも）私の上に降りかかるのがよいのです。（私の願いは）ただ、イエス・キリストの御許に到達することだけなのです。」

3 イグナティオスの殉教思想に関する研究史より

イグナティオスの殉教思想に関する研究史については、日本では佐藤吉昭氏がその著書の中で総括的に紹介しておられる（註6）。ここでは佐藤氏の論述に依拠しつつ、イグナティオスの「ローマの信徒への手紙」における激越な殉教願望の言葉が研究史においてどのように位置付けられてきたのかを明らかにしたい。

佐藤氏は『キリスト教における殉教研究』の「第V部『アンティオキアのイグナティオスにおける殉教思想』」において、N・ブロックスからR・A・バウアに至る「イグナティオスの殉教思想」に関する研究史を詳細に紹介しておられる。その中でもわれわれが特に注目したいのは、研究の視野を「イグナティオスとパウロの比較研究」に絞り込んだハインリヒ・ラトケの1967年の研究である。上掲書の第V部第3章において佐藤氏はラトケの主張を五つの点にまとめる中でその第2に曰く、

「次にイグナティオスにおける殉教死の美化があげられる。彼の場合、殉教は積極的に希求されている。パウロにおいては殉教の運命の許容と覚悟は認められるとしても、それ以上のもではなかった。パウロが抱いていたのは、むしろ不名誉な罪の死への関心と恐れである。パウロには生と死の二者択一が存在し、イグナティオスにはそれが存在していない。」（註7）

また、その他でわれわれが注目したいのは1974年にリチャード・バウアによって『Vigiliae Christiana』に発表されたという論文「アンティオキアのイグナティオスの書簡におけるエピテュンカノーの意味」である。佐藤氏のまとめているところを聞いてみよう。曰く、

「もし『神への到達』が『神との一致』の言葉で語られうるのなら、到達と一致の両者の実現条件は何であるのが改めて疑問になる。すでに、『教会との一致』と『司教との一致』が、『神との一致』、具体的には『キ

リストの受難への参与』にまで到達するための前提であることが述べられている」（註8）

さらに曰く、

「ここでバウアの論旨を纏めてみよう。第一に、彼の主題である『エピテュヘイン』（到達）が救済論的焦点となっている。しかもそれは、同時にキリスト教的生における贖罪論的目的とも関係していた。第二に、バウアはこの『エピテュヘイン』を、イグナティオスのもう一つの極めて特色ある概念、『ヘノーシス』の使用を厳密に検討することで理解しようと試みているが、それによると、この概念には種々の相、もしくはレベルが存在し、それらすべては究極的には『神との一致』に達することが明らかになる。第三に、キリスト教徒のキリストの生涯と受難との自己同一のなかで、これらのヘノーシスとエピテュヘイン（到達）が互いに交差し合うことが検討された。たとえば、自己のキリストの受難への参与のなかに『神への到達』の可能性が生じる。しかし、この参与は、神自らが受難することでの受難（Passio）における神との一致なのであるから、実際には神との一致を意味する。そこで、この『一致』とはわれわれの『神への到達』の様態として記されてもよいものである。第四に、イグナティオスは『沈黙』（*συνή*）を、それによって神に到達する『手段』としても記述しているのを見た。そして最後に、現在と未来の間の終末論的緊張というべきものがイグナティオスのもとでは見出された。人間の究極的救済は未来、あるいは歴史的発展とは結び付けられておらず、むしろそれは直接的あり方で実現されるものであった。」（註9）

以上三つの引用に基づきつつイグナティオスの件の激越な殉教願望の言葉を考察して、われわれは問題点を二つに絞りたい。一つは、イグナティオスは確かに「死にたがっていた」ということ。もう一つは、その殉教死の目的は教会の文脈における「神への到達」「神との一致」にあったということ。前者については、「ローマのキリスト者へ」4章の次のような記述を単純に読むだけで誰の目にも明らかであろう。それは、例えば4章2節の次のような言葉に顕著であろう。

「どうか獣が私の墓となるよう、また私が死んだのち誰かに迷惑をかけるといけませんから、獣が私のからだのどこも残さないよう、むしろ獣を煽って下さい。」

このような言葉をわれわれは、ともすればイグナティオスの性情の激しさに帰したくなるが、上記の二つ目の「その殉教死の目的は教会の文脈における『神への到達』『神との一致』にあった」という要素を考慮すると、事情は一変する。そのことを考慮するなら、イグナティオスは教会の一致のために殉教死を切望したことになるのである。そこで、次に教会の秩序を重んじるイグナティオスの特徴についてまとめてみたい。

4 教会の秩序を重んじるイグナティオス(註10)

ローマのクレメンズに似て、イグナティオスも教会の指導者に信徒が服従することを勧めている。まず、「エペソのキリスト者への手紙」の4章1節に曰く、「それゆえあなた方は監督の意向に一致してゆくのがよろしいのです—あなたがたは、実際そうしておいでですが。というのはあなた方の、その名にふさわしい長老団は、神にもふさわしいのですが、弦が豎琴に対するように、監督に調和しているからです。こうしてあなた方は心をひとつにして、愛のシンフォニーをもって、イエス・キリストを歌っているのです。」

長老団が「弦が豎琴に対するように、監督に調和している」というのは、美しい、そして的確な比喩である。長老団という弦は、監督というハーブに張られて美しい和音を響かせるというのであろう。そして、長老団は一般信徒という弦に対してはハーブの役割を果たすというのであろう。

次に、「エペソのキリスト者への手紙」の4章6節に曰く、

「また監督の口数の少ないのをみたら、余計彼を恐れなさい。私達は家の主人が一家の管理のために遣わした人を、誰であれ、遣わした人自身のように受け容れなくてはなりません。だから私達が監督を主御自身のようにみなさなくてはならないのは明らかです。」

「口数の少ない監督」というのは、たぶん「おとなしい監督」ということであろう。おとなしい人を、人は侮りがちである。そのような愚かな人々に対して、イグナティオスは、「おとなしい監督」を侮らずに「余計恐れなさい」と言うのである。一般信徒が愚かな思い違いをして監督を侮るようなことがあると、大切な

教会の秩序が乱れるからである。同じような響きの言葉は「マグネシアのキリスト者への手紙」にも見られる。3章1節に曰く、

「そしてあなた方にふさわしいのは、監督の若年を利用せず、父なる神の能力に従って、監督にあらゆる敬意を払うことなのです。」

監督が若いと侮る一般信徒がいたことが伺える言葉である。この点は、新約聖書のパウロの言葉とも響きあう。「テモテへの手紙一」の4章12節でパウロ曰く、「あなたは、年が若いということで、だれからも軽んじられてはなりません。むしろ、言葉、行動、愛、信仰、純潔の点で、信じる人々の模範となりなさい。」

監督にもこのような心構えが必要なことは当然であるが、信徒も監督を若いからといって侮るようなことがあっては、教会の秩序は崩壊する。それ故に、イグナティオスはダメ押しのように「マグネシアのキリスト者への手紙」7章1節で次のように言っている。

「監督と長老をぬきにしては何事もしてはなりません。自分たちだけで何が正しいかを判断しようとしてはいけません。」

同じような言葉は「トラレスのキリスト者への手紙」にも見られる。2章2節に曰く、

「あなた方は、あなたが(言われなくても既にそう)しておられるように、監督ぬきでは何事もすべきではありません。」

さらに「スミルナのキリスト者への手紙」でも、同じような言葉が語られる。8章1節に曰く、

「誰でも教会に関することを監督ぬきで行ってはなりません。監督のもとで、または彼がそれを委ねた人のもとで行われる聖餐だけが確かなのだと考えなさい。」

ここでは聖餐式の執行者としての監督の重要性が強調されている点が目立っている。そして同じ章の2節に極めて重要な言葉が登場する。曰く、

「イエス・キリストが在したもうところ、そこに、共同の教会があるのと同様、監督が現れるところ、そこに全会衆があらねばなりません。監督なしに洗礼を施すのも愛餐を行うのも適法ではありません。」

ここには、先程の聖餐に加えて洗礼の執行者としての監督の重要性が強調されている。しかしそれより何より重要なのは「共同教会」という言葉である。ここに歴史上初めて、文書の中でカトリケーという言葉が

登場したのである。イグナティオスは言っている。「イエス・キリストが在したもうとところ」に「公同教会」は存在するのだと。すなわち、「公同教会」とは抽象的な教会のことではなく、この地上のそこここにある、様々の問題を含みつつ、しかし、イエス・キリストの名によって信徒が集まっている教会のことである。この、教会を「信ず」と、現代のキリスト教徒も毎週の礼拝毎に、使徒信条の中で唱えている。あの「我は教会を信ず」は、私達の周りのそこここにある個々の問題に満ちた教会を、「公同教会」として「信ず」と言うのであるから、実に重い言葉だと言わねばならない。しかしまた、その向こう三軒両隣の教会を信じずして、私たちはどの教会を信じるといえるのであろうか。

最後に付け加えになるが、イグナティオスは挙句の果てに次のようなことを言っている。「ポリュカルボスへの手紙」の5章2節に曰く、

「めとる者また嫁ぐ者は、監督の承認を得て、一緒になるのがよろしいのです。それは、結婚が欲情のためではなく、主の御意に従って行われるためなのです。」

こうして、イグナティオスによれば、信徒は結婚まで、監督ぬきに行つてはならないということになる。私はここまで、イグナティオスの教会の秩序を重んじて監督や長老に一般信徒が従うべきだという言葉、無批判に引用してきた。それは、監督を中心に教会が一致しなければならない理由を、イグナティオスをはっきりと語っているからである。イグナティオスは、監督をしている人間が一般信徒より立派だから監督に従えとは言っていない。監督の中には、てきぱきと発言できない人や、若造もいたのである。普通にはとても尊敬できそうもない人もいたのである。それにもかかわらず、イグナティオスが監督をはじめ教会の指導者に一般信徒は従うべきだとしたのは、偏に機能的な意味合いからであった。教会の指導者は何のために存在するかといえば、それは会衆一同が一致するためであった。そのために、たとえば監督は監督の機能を果たすのである。では教会の会衆はなぜ一致しなければならないのか。それは、教会が教会としての機能を十分に果たすためである。教会の機能とは何か。それは人々をイエス・キリストの福音によって救うことである。そのためには福音の根幹が揺るがせにされて

はならない。正しい福音が宣べ伝えられなければならない。当時の教会には、その点において二つの恐るべき敵があった。一つ目の敵はユダヤ教であり、二つ目は異端であった。イグナティオスはその敵について語っている。まずユダヤ教について、「マグネシアのキリスト者への手紙」の8章1節に曰く、

「違う教えや古く無益な作り話に惑わされてはなりません。もし今にいたるまでユダヤ教に従って生活しているとしたら、私たちは恵みを受けなかったと言いつていることになります。」

次いで、9章1節に曰く、

「もし旧い生き方で暮らしていた人々が希望の新しいのもとに到り、もはや(ユダヤ教の)安息日(土曜日)を守らず、むしろ主の日(キリストの復活した日曜日)を守って生きるなら—主の日に私達の生が、彼を通して、立ちあらわれたのです。」

さらに10章3節に曰く、

「イエス・キリストを語ってユダヤ教的に生きるのはおかしなことです。なぜなら、キリスト教がユダヤ教に基礎付けられているのではなく、ユダヤ教がキリスト教に基礎を置くのだからです。」

このようなユダヤ教という敵と戦うためには、教会内の一致は不可欠であった。またイグナティオスは異端についても言及している。「トラレスのキリスト者への手紙」の9章1節2節に曰く、

「誰かがイエス・キリストを語らないおしゃべりをしたら、耳を覆いなさい。イエスはダビデの裔、マリアから真実に生まれ、食べ飲み、ポンテオ・ピラトのもとに真実に迫害され、真実に十字架につけられて死んだのです。…。彼はまた真実に死者の中から甦ったのです。」

イグナティオスが「耳を覆いなさい」と信徒に命じた相手は異端に他ならない。その後続く言葉から、その異端がドケティストであることが分かる。ドケティストという呼び名は「見える」という意味のギリシャ語の動詞ドケインに由来する。そこから「仮現論者」とも呼ばれている。彼らは、イエス・キリストは人間であるかのようにであったが、実はそう見えただけで、本当は人間でなかったと言う。彼らによれば、神聖な神が汚れた肉体に入るわけがないということになる。こうして彼らはイエス・キリストの受肉の事実、

すなわち誕生や十字架の死などを否定した。だからこそ、イグナティオスは今しがた引用した箇所、「イエスはダビデの裔、マリアから真実に生まれ、食べ飲み、ポンテオ・ピラトのもとに真実に迫害され、真実に十字架につけられて死んだのです」と言っていたのである。次に引用する「スミルナのキリスト者への手紙」の2章1節では端的にドケティストたちを次のように決めつけている。

「彼（イエス・キリスト）は真実に受難したのです。ある不信者共が彼の受難はみせかけだというのは違います。みせかけだけで存在するのは彼等の方なのです。」

なんとも痛烈な言葉である。さらに4章1節では次のように言う。

「私は人の形をした獣から、あなた方を前以って護っておきたいのです。」

こうしてイグナティオスにとってドケティストは今や「人の形をした獣」である。なぜイグナティオスは、これほどまでにドケティストを口を極めて罵るのであろうか。それはドケティストの思想が、イエス・キリストの福音の恵みを台無しにするものだからである。「スミルナのキリスト者への手紙」の7章1節に曰く、

「彼らは聖餐も祈りも守らないのです。それは彼らが聖餐が私達の罪のために苦しみを受けた、私達の主イエス・キリストの肉だということを告白しないからです。」

このようにドケティストの考え方は、イエス・キリストの福音を私たちに最も良く感得させてくれる聖餐の恵みを台無しにしてしまうものだった故に、イグナティオスは信徒がドケティストの言うことを聞かないようにと勧めたのである。

ところで、聖餐に対するイグナティオスの考え方は、大変ユニークなものでもある。すなわち「エペソのキリスト者への手紙」の20章2節に曰く、

「あなた方が集まるのは、あなた方が心を乱さず監督と長老団に従うため、そこであなた方は一つのパンを裂くのですが、これは不死の薬（ファルマコン アタナシアス）、死ぬことなくイエス・キリストにあって常に生きるための解毒剤（アンティドトス）なのです。」

ここにいたって、聖餐のパンは、イエス・キリストの体の単なる象徴でもなく、またイエス・キリストの体そのものであるに留まらず、「不死の薬」、そして「解毒剤」になっている。このような考え方は聖餐の内実をいっそう豊かにする考え方だとわれわれには思えるが、いかがなものであろうか。

以上、イグナティオスがユダヤ教やドケティズムからキリスト信徒を守るべきだと考えて、そのために、教会員たちは監督をはじめとする教会の指導者たちに心を合わせて一致すべきだとしたであろうことは想像に難くない。

イグナティオスの考える教会の役割は他にもあった。「ポリュカルポスへの手紙」の4章1節に曰く、「寡婦が無視されないようにして下さい。主について彼女達のことを配慮しなさい。…。集会をもっとしばしば開いて下さい。ひとりひとりの名を覚えて、しかも全員を求めなさい。」

まず寡婦への配慮に着目すべきである。これは新約聖書においては当然の考え方ではなかった。「テモテへの手紙一」の5章4節以下に曰く、

「やもめに子や孫がいるならば、これらの者に、まず自分の家族を大切に、親に恩返しをすることを学ばせるべきです。それは神に喜ばれることだからです。身寄りがなく独り暮らしのやもめは、神に希望を置き、昼も夜も願いと祈りを続けますが、放縦な生活をしているやもめは、生きていても死んでいるのと同然です。やもめたちが非難されたりしないように、次のことも命じなさい。自分の親族、特に家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています。」

ここには、まず家族や親族が寡婦に配慮すべきだということであり、教会共同体が寡婦の世話をするという思想は弱いといわねばならない。その点、イグナティオスの考え方は相当進んでいると言えよう。さらに彼は「集会をもっとしばしば開く」ようにと教会指導者であったポリュカルポスに勧め、教会員「ひとりひとりの名を覚えて、しかも全員を求めなさい」とも言っていた。これは、教会そのものを生活の場とするように信徒を導けというイグナティオスの命令と言ってもよいのではないだろうか。

まとめると、イグナティオスは、イエス・キリス

トの純粋な福音で人々が救われるために、教会がその福音の器として十全たる働きをするようにと願いつつ、監督を中心にした教会の一致について語っていたと言えるであろう。彼が監督を重視したのはただそのためだけであって、何か監督に特別な権威を付けることを意図したのではなかった。

5 エックハルトのドイツ語説教第5番a、 b、第6番、第86番における「生」 そのものの強調

ここでは、エックハルトのドイツ語説教研究の権威デイトマール・ミートも近著で、エックハルトのドイツ語説教の内で「生」そのものについて述べられている説教として選んでいる「ドイツ語説教第5番a、b、第6番、第86番」を取り上げたい(註11)。

まずドイツ語説教第5番aの第5段落にエックハルト曰く(註12)、

「私たちには生きること以外には望むものはなにもない。私の生きることは何であろうか。それは自分自身の内部から動かされるものである。外部から動かされるものは生きていない。私たちが彼と一緒に生きるならば、私たちも彼のうちで内部から一緒に行動しなければならない。したがって、外部から行動してはならない。むしろ、私たちが生きているところ、すなわち彼によって、そこから動かされなくてはならない。私たちは内部の私たち自身のものから行動できるし、行動せねばならない。もし、彼のうちか彼によって生きるならば、彼は私たちがのものから行動しなければならないし、私たちが私たちがのものから行動しなければならない。すなわち、神がすべてのことを御自分のものから、御自分自身により行うように、私たちも私たちがのうちの神である自分のものから行動しなければならない。神は完全に私たちがのものである。すべてのものは私たちがのうちにある私たちがのものである。」

ここには自分自身の心の底からの必然的な促しに従って生きることに對する、全面的な肯定がある。特に前半の「私たちには生きること以外には望むものはなにもない。私の生きることは何であろうか。それは自分自身の内部から動かされるものである。外部から動かされるものは生きていない」という言葉は、エッ

クハルトの具体的な生に対する確信を語って余りがある。

次にドイツ語説教第5番bの第8段落にエックハルト曰く、

「もし誰かが生に向かって千年の間、なぜお前は生きているのか、と問い続けたとすれば、生は『私は生きているがゆえに生きている』としか答えないであろう。この理由は、生は自分の根底から生き、自分の本性から湧き出ているからである。それゆえ、生は自分自身のために生きているから、なぜと問わないで生きているわけである。では、もし誰かが自分の根底から行動している真実な人に『なぜあなたはあなたの行いをするのか』と尋ねるなら、適切に答えれば、『私は行いをするゆえに行う』としか答えないであろう。」

何かのために生きるという言い方を拒否する、「生」そのものに対する強烈な肯定がここにはある。

次にドイツ語説教第6番の第10段落にエックハルト曰く、

「すべてのもののなかで、生ほど好ましく、望ましいものはない。同じく、いかなる生も生き続けたくないというほどに悪く、辛いことではない。(中略)。なぜあなたは生きるのでしょうか。(それは)生きるためである。でも、なぜ生きるのかは、あなたは知らないであろう。生はそれ自体望むに値するものであるから、私たちは生をそのものために望むのである。(中略)。生は仲介なしにこのように神から流れ込むゆえに、彼らは生きることを望むのである。では、生とは何であろうか。神の存在が私の生である。もし、私の生が神の存在であるならば、神の存在は私の存在でなければならない。神の純粋な(原)存在は私の(原)存在でなければならない。それは、少なすぎることも、多すぎることもない。」

生を実存的に生きる者は「なぜ生きるのか」などと問いはしないという消息を、実際に町で生活する人々の生活から感得していたエックハルトにしてこそ発見し得た、「生」そのものの意味の深さがここには見られる。

そして最後に、ドイツ語説教第86番の第5段落でエックハルト曰く、

「生きることは最も高貴な認識を与える。生きるということは、神を除いて、この人生で受けることができ

る一切のことを、喜びや光をよりよく認識したうえ、ある仕方では永遠の光よりも純粹に認識する。(つまり) 永遠の光によって自己自身と神を知ることができるが、神を離れた自己自身は知ることはできない。ところが、生きることにより神を離れても自分自身を知ることができる。これが、(生きることと) 自己自身のみを見つめるとき、『同等』と『不等』と(の本質)は何かを、よりはっきりと見分ける。聖パウロと異教の学者はこれを証言した。聖パウロは脱魂状態で神と自己自身を神のうちに靈的に(純粹に靈的な仕方)で見たけれども、神のうちにはそれぞれの徳をありありと具象的にはっきりとは認識できなかった。そのわけは、彼が(回心の前に)実践の行為においてその修練を積んでいなかったからである。異教の教師は諸徳を修練することにより非常に深い洞察に達しているので、彼らはパウロやすべての聖人が初めて脱魂の境地に浸っているときよりも、具象的に的確に諸徳(の本質)を認識したのである。]

この箇所については、かつてわれわれは「マイスター・エックハルトのドイツ語説教における宗教的寛容」と題してキリスト教史学会で発表した際に次のようにコメントしておいた。曰く、

「ここで、エックハルトは先に引いた説教第9番の言うところによれば、『自然の光のうちで』真理を把握しているにすぎず、『聖なる学者』の知には『はるかに』及ばないはずの『異教の師』が、パウロやキリスト教の聖人達よりも、諸徳の本質の認識に到達していると言うのである。特にエックハルトが『異教の師』の『諸徳の修練(uebunge der tugende)』を積極的に評価している点に着目するとき、説教第9番のエックハルトの『異教の師』評価と、この説教第86番のそれとの間の違いは明白である。それは、『エックハルトにおける宗教的寛容』という観点からするならば、エックハルトの大いなる進歩だとわれわれは考える。たとえばそれが、マルタとマリアの評価を逆転させるための逆説的文脈における言葉だとしても、『異教の師』の洞察に対するエックハルトの積極的評価は特筆に値しよう。」(註13)

しかし、今回は、正に「生」そのものの価値を強調する文脈で取り上げたわけである。エックハルトは、生活から遊離した靈的生活の空しさをラディカルに説

いているのである。

以上4箇所の引用から浮かび上がって来るのは、エックハルトの生活感覚である。エックハルトが1313年以降、シュトラースブルクを皮切りにケルンに向かってドイツ語説教活動を進める中で、その聴衆に半聖半俗の擬似修道女であるベギンたちが存在したことは、これまでにわれわれも折に触れて論じてきたところである(註14)。このベギンの存在した時代背景を考慮してこそ、エックハルトの「生」そのものの強調は生きてくる。ベギンは町の中で、不利な労働条件も厭わずに働かねば生きてゆけない人々であった。そのようなベギンの「生」そのものを直視する中からこそ今しがた引用した4箇所のエックハルトの言葉は生まれたのだと、われわれは考える。もとよりエックハルトは神秘家である。たとえば、われわれが引用した説教第6番にも次のような「ウニオ ミステイカ」そのものの言葉が見られる。曰く、

「父はその子を絶えることなく生み続ける。さらに、付け加えれば、神は私を神の子として、同じ子として生むのである。さらに、いえば、神は私をたんに彼の子として生むばかりでなく、私を御自身として、御自身を私として、私を神の存在、神の本姓として生むのである。最内奥の泉で私は聖霊のうちから湧き出る。そこには一の生、一の存在、一の行いがある。」

このような言葉は、もしベギンが迫害を受けて死を覚悟せねばならなくなったときに、その魂を根底から支える信仰を生み出したであろう。やがて異端審問という迫害の嵐に自分自身がさらされたエックハルトを支えたのも、「ウニオ ミステイカ」なる信仰であったであろう。しかし、エックハルトはイグナティオスのように死にたがりはしていない。エックハルトは、生の意義をあくまでも深く認識していたのである。次にわれわれは、結論として、イグナティオスとエックハルトの迫害に遭遇した時の態度を比較検討してみたい。

結 び

エウセビオスも報告していたように、イグナティオスは「キリストスを証したためにシリアからローマの都に送られ、獣の餌食になった。彼は監視人付きの

最も厳重な警戒の下にアジア経由で送られたが、途中の都市の教会管区を御言葉の説教（ホミリア）と勧め（プロトロペー）によって励ました」。さらに彼は「その他にも、ローマの教会宛に書き、彼らが彼が殉教しないようにと懇願して、彼が望んでやまないその希望を彼から奪ったりしないようにと要求した」のである。イグナティオスの「ローマのキリスト者へ」から、もう一度引用してみよう。曰く、

「①私に獣の餌にならせて下さい。私は獣を通してこそ神に到達することが出来るのです。私は神の穀物であり、キリストの潔きパンとなるため、獣の歯で碾かれるのです。②どうか獣が私の墓となるよう、また私が死んだのち誰かに迷惑をかけるといけませんから、獣が私のからだのどこも残さないよう、むしろ獣を煽って下さい。世が私のからだをも見なくなったとき、そのとき私はほんとうにイエス・キリストの弟子となるでしょう。こういう道具（獣）によって私が神への犠牲とされるよう、キリストに願って下さい。」

ここには、「死ぬ神秘主義」がありありとしている。イグナティオスの言葉に、この世で生きることに對する深い認識は微塵も読み取ることはできない。他方、エックハルトは異端審問の裁きの場に引き出された時、どのように言っているだろうか。1327年1月23日にケルンのドミニコ会修道院教会にて語られた弁明においてエックハルト曰く、

「私、神聖なる神学博士マイスター・エックハルトは神の御前にて宣言する。私はいかなる信仰上の過ちも、いかなる不品行も、なしうるかぎり忌避してきた。このような過ちは私の学問的立場や聖職者としての立場と相容れないものであったし、これからもそうである。よって、この点において私の書物、言葉、説教に何らかの過ちがあるとしたら取り消す。私的であれ、公的であれ、いつなんどきのものでも、直接あるいは間接的な発言でも、誤った見解によるものであれ、倒錯した分別によるものであれ、そのようなものは公式に、ここにお集まりの方々の前で取り消そう。今このときより、私はそれを述べなかつたし、書かなかつたとみなされたいからである。そしてまた、私を悪であると主張する人がいることを知ったからである。たとえば、私が『私の小さい指は全てを創造したのである』と説教した時、私は大それたことを思ったり言ったり

したのではなく、むしろ少年イエスの指について言ったのである。（中略）。すべて（訂正の）条件を満たすものは、（最初に）述べたように訂正し取り消そう。私は全般的にも、あるいは細部においても、ほかいかなる場合でも、意味内容があまり健全でないということが明らかな場所はそれ（訂正）が有用である場合には、すべて訂正し取り消す。」（註15）

エックハルトが殉教の死をイグナティオスのように捉えていないことは明らかである。エックハルトは死にたがってはいない。事実、エックハルトはこの後、異端の嫌疑を晴らすべく当時教皇庁のあったアヴィニオンに旅立っているのである。このように、エックハルトの神秘主義は、あくまでも「生きる神秘主義」であった。

では、イグナティオスの神秘主義とエックハルトの神秘主義の違いはどこから来たのだろうか。われわれはそれをすでに明らかにしたはずである。イグナティオスはその人生の出会いの中で「生」の豊かさを感得していなかったといわざるを得ない。他方、エックハルトは少なくともベギンとの出会いを通して「生」そのものの豊かさを感得していたのであり、それが、エックハルトの「生きる神秘主義」の源泉であった。

註

- 1 佐藤吉昭著『キリスト教における殉教研究』創文社、2004年、369頁。
- 2 エウセビオスの『教会史』第3巻22章
- 3 同上、36節
- 4 同上、
- 5 この引用の邦訳は『使徒教父文書』講談社、1974年、126-128頁の八木誠一訳を用いた。
- 6 佐藤、上掲書、245-378頁。
- 7 同書、318頁。
- 8 同書、359頁。
- 9 同書、368頁。
- 10 この章のイグナティオスの手紙の引用は全て次の書物からのものである。『使徒教父文書』講談社、1974年、157-212頁、八木誠一訳。
- 11 Dietmar Mieth: Meister Eckhart Mystik und Lebenskunst, Patmos Verlag, 2004, pp 11-15.
- 12 この章のエックハルトのドイツ語説教の引用は全て次の書物からのものである。マイスター・エックハルト著、植田兼義訳『キリスト教神秘主義著作集6』、教文館、1989
- 13 2003年度キリスト教史学会研究発表要旨より
- 14 最近では次の書物の解説でも、比較的明確に触れられている。上田閑照訳、香田芳樹訳『マイスター・エックハ

ルト ドイツ語説教集』、創文社、2006年、255頁に曰く、
「彼（エックハルト）は近隣の女子修道院を定期的に巡察
するかたわら、魂の牧者を欠いたまま大都市の中で肩を寄
せ合って信仰生活を送るベギンたちのもとにも足を運んだ
にちがいない。」

- 15 Kurt Ruh Meister Eckhart Theologe, Prediger, Mystiker, C.H.
Beck, 1985, p 182.